



# 但馬水産技術センターだより



## 漁況情報 (G2556号)

令和8年3月18日

兵庫県立農林水産技術総合センター  
但馬水産技術センター 発行

### ホタルイカの漂着 (身投げ) が確認されました

令和8年3月11日に、香美町今子浦海岸にホタルイカが漂着しているとの連絡が職員あてにありました。翌3月12日にはJF但馬竹野支所より竹野浜にも漂着していると連絡を頂きました。これらを受けて、3月11～13日の間に、但馬沿岸の砂浜域などで、ホタルイカの漂着の有無を調査したので報告します。

#### 1. ホタルイカの漂着 (いわゆる「身投げ」) 現象について

日中は200m以深の深場に分布するホタルイカが、夜間に海面近くまで浮上(産卵し)、通常は深場へ帰っていくところ、闇夜で方向感覚を失ったり、風、波、流れで運ばれたりして海岸に漂着する現象を、富山湾では「身投げ」と呼んでいます。海底地形が急峻で産卵場所が沿岸に近い富山湾では毎年見られる現象で、タモ網ですくう人が押し寄せ、風物詩となっていますが、山陰では岸から産卵場 (= 漁場) までの距離が約20kmと遠いためめったに見られません。(論文では1992年に記録があります。)

#### 2. 調査地点と漂着が確認された地点

新温泉町釜屋から豊岡市気比にかけての計18地点の砂浜、斜路の汀線(波打ち際)でホタルイカ漂着の有無を調査しました。

この結果、香美町境から竹野町宇日にかけての計7地点で漂着を確認し、この時点での漂着は但馬東部に集中していました。(図1)中でも打ち上げられた個体密度が高かった(汀線10mあたり100個体以上)地点は、香美町の今子浦海岸、竹野町の宇日海岸と切浜海岸でした(写真1～3)。これらの海岸はいずれも浜の西詰で多い傾向がありました。

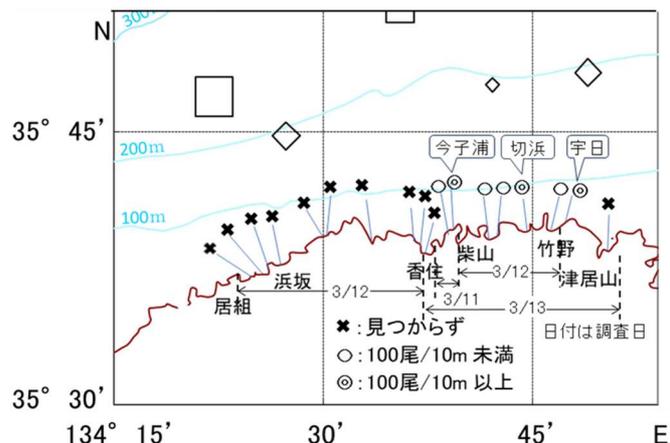


図1 調査地点位置とホタルイカ漂着状況

#### 3. 漂着個体の性状

今子海岸と境海岸 (いずれも香美町) で採集した121個体は全て成熟メスでした。体サイズ、生殖腺熟度指数ともに、平均値は3月2日に沖合で採集した標本より大きく(表1)、胃内容物は認められませんでした。これらは産卵期を迎えた群れと考えられ、富山同様、漂着は産卵行動と関係していることが示唆されました。

#### 4. 漂着時の気象・海象・漁場水深など

- ・2月末から3月初めにかけて漁場水深が浅めに形成されています。(図2)
- ・今冬は沖合から但馬沖にかけて冷水域が強く張り出し、接岸気味に推移しています。(図3)
- ・モデルで推定された流れを見ると、沿岸の流れは東流(み潮)でしたが但馬東部では離岸し、ごく沿岸に反流を生じていました。(図4)
- ・低気圧通過と冬型の気圧配置の影響で、風向きは南寄りと北寄りを繰り返していました。

漂着のメカニズムは完全に解明されていませんが、通常より浅めに形成された産卵場から産卵のため浮上した個体が沿岸の流れに捕捉され漂着したのと考えています。

(この内容は当センターホームページに掲載しています。)

お問い合わせ先：兵庫県但馬水産技術センター (担当：大谷)

TEL：0796-36-0395 FAX：0796-36-3684

email：nouringc\_tajima@pref.hyogo.lg.jp

ホームページ：https://www.hyogo-suigi.jp/tajima/index.html



写真1 今子浦海岸の漂着状況(2026/3/11)  
(中央下はイソギンチャクに捕食されている個体)



写真2 宇日海岸の漂着状況  
(2026/3/13)



写真3 切浜海岸の漂着状況  
(2026/3/13)

表1 漂着したホタルイカの性状

採集年月日	2026/3/11 (身投げ個体)	2026/3/2 (トロール採集個体)
平均外套背長(mm)	54.1	49.6
性比(メスの割合)	100%	65%
生殖腺熟度指数	6.49	5.36

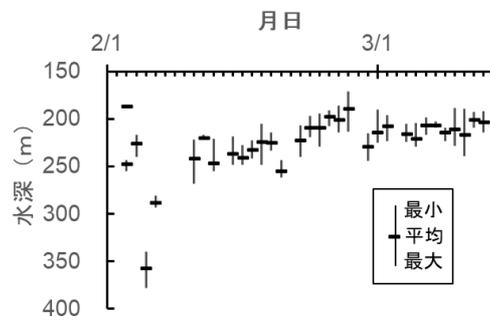


図2 標本船のホタルイカ操業水深

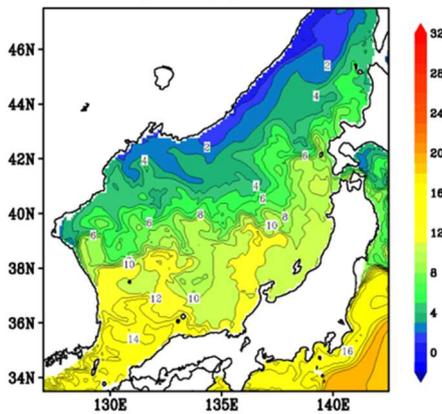


図3 2026/3/10 50m層水温  
(水研機構 FRA-ROMS IIより)

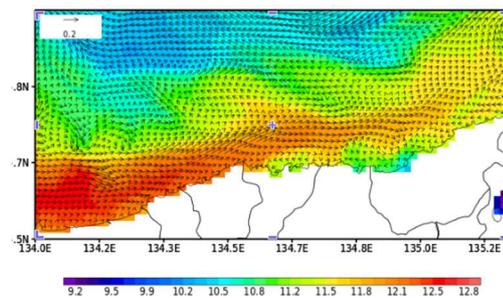


図4 2026/3/10 3m層の流れと水温  
(九大応力研 DREAMS\_CWより)